

清水幾太郎著「私の文章作法」中公文庫、中央公論社 1995年9月3日刊を読む

翻訳のはなし—使命感—

1. 言うまでもありませんが、私が翻訳の仕事に手を出すのは、快感のためばかりではありません。快感などという軽いことより、どんなに苦勞しても、優れた外国書を日本文に直して、日本の多くの人々に読んで貰おうという重い使命感、結局、それが私を動かしているのだと思います。
2. 余談になりますが、先日、久しぶりのヨーロッパ旅行を試み、その途上、ローマで数日間を過ごしました。私としては、以前に見た名所旧蹟より、町の書店に興味がありました。ローマの書店を歩き回って私が驚いたのは、実に多種多様な外国書がイタリア語に訳されていることでした。日本では、少数の専門家が原本を読んでいるだけで、翻訳がないため、一般の人々には読むチャンスがないような本が、片端からイタリア語に訳されて、しかも安い値段で売られているのです。
3. 現代における日本文化の高さとイタリア文化の高さとをどう比較したらよいか、私には判りません。しかし、私によく判ることは、科学や思想や哲学における諸外国の業績を大衆が母国語で読むことが出来るという点で、つまり、それらが大衆に開放されているという点で、イタリアの方が日本とは比較にならないくらい進んでいるという点です。
4. ローマの書店から書店へと歩きながら、私が思い出していたことがあります。日本の場合、戦前は言論出版の自由がなく、戦後は大きな——というより、無制限の——自由があるようですが、ひょっとすると、自由のない戦前の方が多方面の外国書が翻訳され、自由の大きい戦後の方が或る傾向の外国書だけが翻訳されているのではないかと。戦前と戦後とでは多くの条件が違いますから、両者を機械的に比較することは困難ですが、極端な言い方をしますと、自由な戦後の日本のどこかに見えざる検閲官が隠れていて、密かに思想統制を行なっているのではないかとと思われるほど、限られた傾向の外国書だけが翻訳されています。

インテリの特権(?)

5. 話を本筋に戻しましょう。自分が苦勞して外国語で読んで大いに感心した書物が、ヒョッコリ、誰かの手で日本文に翻訳されたという場合、私の気持は、決して簡単なものではありません。これで、立派な本が日本の大衆の手に渡るようになったという喜びと一緒に、自分の特権(?)がどこかに消えてしまったような淋しさを私は感じるのです。恐らく、私だけでなく、世のインテリの多くは、私と同じような淋しさを感じるのではないのでしょうか。

6. 昔、印刷術が発明された時、その後、新聞というものが現われた時、近年、ラジオやテレビの放送が開始された時、つまり、文化が大衆化されるという決定的瞬間に当って、真っ先に新しいメディアを嘲笑し、これに反対したのは、それぞれの時代の高名なインテリでした。これを考えますと、いつの世でも、彼らは、文化の大衆化による自分の特権の喪失に対して強い恐怖心を抱いているのでしょう。

7. 翻訳も同じことで、一方、文化の大衆化に大いに役立つのですが、他方、或る種のインテリの特権を奪うこととなります。特権を奪われた腹立ち紛れに、「プラトンは、ギリシア語で読まないと判らない」とか、「ゲーテは、ドイツ語で読まねば……」とか、そんなことを^{つぶや}くインテリが現われるのです。——どうも、文章の話から少し逸れてしまいました。

P80 ~ 83

<コメント>

翻訳家の社会的使命とは何かがひしひしと伝わってくる。自分が読むことのできない言語で書かれた本を読むことができる幸せを実感せざるを得ない。有難い限りだ。

2022年4月26日(火)